

ひとつの試み

—金峰プロジェクト



開拓・ワークキャンプ・共同体……

小林 茂夫

金峰開拓とSC I

SC I (国際的なワークキャンプ組織) が、その活動の第一歩をこの金峰開拓地 (山梨県東山梨郡の僻地にある) にしたのには、昭和三十九年七月二〇日である。

あれから八カ年が経ち、ここにおいて組まれたワークキャンプは三十数回に及ぶ。その間、キャンプ参加者としてここを訪れた人々の数は、四千人になんなんとする。国籍も二十カ国をこえる。昭和四二年十月からは当時最も活発なメンバーの一人が、結婚早々開設されたばかりのSC I「極東アジア地域トレーニングセンター」の初代駐在者として、ここに生活の居をかまえた。以後、駐在者としては、私たち家族が昭和四年四月七日に入ればかりはしたが、年を追うごとに、金峰開拓とSC Iの関係は親密さを増し、深い相互理解、相互扶助の精神がここに育ちつつある。この金峰プロジェクトを訪れる人は誰でも気づくように、ここにはもはや旧来のワークキャンプ即労働奉仕という意味での「奉仕する人々と奉仕を受ける人々」という関係は存在しない。柳平という地に、金峰開拓の人々

とS・C・Iのメンバーたちが手をとりあって、新しい人間関係に立脚し、人間として考えうる最高の最善の生き方が実践されつつあるといつても過言ではない。

このような両者の一体意識が続く限り、結果として、今までにどの誰もが予言し、予想できなかったような共同体が生まれるのではないのかという期待を私はいだいでいる。(といっても、それは何世代も何世代も後になつてはじめて実現されるようなものなのかもしれないが)

いずれにしても、我々は、ここにこうして生きていくということの意味を、未知な神聖な人間精神や心を「開拓すること」や、それが実行され「平和に生きる」ことを証明し、世に示してゆきたいと思う。

ある再出発の試み——金峰開拓

(若月雅久組合長著「血と涙と汗」とり)

動機——「そして、私は、日下部駅に下車して、妻の実家から迎えに来てくれた人達と一別以来の挨拶を交し、敗戦の身柄を妻の実家に落ちつけた。だが、七年間の努力と一年間の放浪生活に打ちひしがれ、渡満時の精力

を果たして見出すことが出来ようか。しかし、私は己の個性を知っていた。どうしても開拓者として余生を終り、渡満当時の気概を生かすより他ないと思つた。当時の引揚者のほとんどが闇商売を主として生きるのがならわしであつた。それも、その時に応じた方法であることもよく知っていた。とにかく、私は良心的に生きる方法を求めたい一念であつた。また、人情紙のごしのあわただしさの中で、気分だけでも安心した境地を求めてやまなかつた。それで、私はこの敗戦国民のあわただしき生活圏から逃れて、誰にもなし得ない超高冷地の開拓をとりあげ、早急の生活が可能なるを求めた。私は、生まれ故郷である樋口の奥に夢のような牧場のあつたのを思い出して、旅装をといた翌日からその開拓を計画してみたのだつた……」

入植——「この決断によつて一番困つたことは、子供の通学ということだつた。入植しようとする柳平は本校へ十一キロ、分校へ八キロという山の中であるため、妻とも相談して妻の兄達に集まってもらい、子供の就学について相談した。しかし、長兄以外の兄達は、就学ということ以前に、まずそんな所へ入植

還後二階に上がったままで、近所の子供やいとこ達が遊びにきても遊ぼうとしないのである。こんな状態であつたために、急に両親と別れての生活は思いもよらぬ悲しみであつたにちがいない。私は独断的な考えを後悔した。妻と子は夜明けまで泣き明かして、離れての生活は考えられないという。私はこれには負けた。しかし、こんな小心になつてはいる子供を、あの山の中で成長させたら、どんな人間になつてしまつたらう。こんな不安と、もし他の子供(引揚中兄弟三人死亡)と同じように死んでしまつたのだと思えば……生きていくだけでもうけものである。どんなことになるか連れて行つて後日にことを譲ろうと、出発の朝長兄にその話をし、全員入植することにしたのである。昭和二十一年八月一日のことである。帰還後実に十二日目、私の家族は全員、柳平へ再生を誓つて入植した。

その朝、リヤカーに若干の食料と満州から野宿しながら持ちかへつた土に汚れた毛布を一枚、毛布ほどの布団一枚、小バケツ一個、ニューム鍋一個、ハンゴウ一個、長兄が心配してくれた天幕二枚、漬物若干、衣類は着ただけという全財産を積んで、家族四人を長兄と甥が送つて樋口まで来た。だが、心身共に

疲労し、前途に横たわる不安を一掃するわけにはゆかなかつた……」

目標——「その頃、満州開拓当時の団長、中込氏がひよこり金峰へ登つてきて、私達を驚かせた。子供も満州当時を思い出して慈父のごとくなつていたために、その喜びは一方ではなかつた。団長もこの山の中を想像以上に驚いたらしい。「人間の住むところではないね。全く仙境ではないか。よくここまで観念したものだ」と繰り返し。私はその仙人の住むところを自ら選んだのであり、社会の錯雑から逃れ、また現在の経済力で子供をみじめさにさらしたくないこと、精神だけでも安静を願つてこの仙境を開いてみたい考えを話してみたのである。私はこれに加えて、前人が開拓を志望してなしえなかつたこの超高冷地の開拓に至る上に関心をもつており、この自分の生命は満州から全く捨つたものであり、四つもの島九千万の悩みである日本の姿に標高千五百メートルの當農価値を探求して日本山岳當農の一助ともなりたい念願をもっていることも話した……」

通学と越冬と——「子供は驚くほど元気

するよりも一ヶ月に二、三日働けば食つて行ける道を考えるべきだろうと、私の決断をひるがえそうとした。つまり、闇屋でもして時を稼ぎ、打開の道を見つづけるべきだといろいろ研究もしてくれた。

しかし、私のいったん決定した考えは堅かつた。私の個性としてそうした不自然なことは考えてもみず、かりにそれをやってみたら、ここで、出来ない自分を知つていた。また、全裸の引揚者がこのあわただしき生活圏で生きることは精神的に気苦労が多く、子供等には気持だけでも周囲と没交渉な安心した生活を送らせたい。非常に消極的だと批判を受けるかも知れないが、今の私の心境にはその考へ方以外には見当たらないと、兄達に訴えたのであつた。結局、兄達もその決意を受入れて一俵当り表を送つてくれること、また子供の就学の問題は長兄が一人、次兄が一人を学校を卒業まで面倒みてくれることに決めてくれた。これで私の困つている問題は解決したので安心して入植の準備に移つた。

しかし、この私の安心と反対に、子供二人は二階で泣き続けた。妻も子供と共に泣いている。なぜなら、子供は敗戦後一年間の恐ろしい満州の生活が恐怖症のようになって、帰

に通学している。宿題があると、暗いランプよりはと庭に出掛けてやつと見える程まで勉強する努力には親としても頭の下がるものがあつた。成績も満更でもない。元氣よく報告を受けると親もまた情がひとしお湧き、大きなふところに抱えてやりたい気になる。受持の先生も特に留意され、面倒をみてくれた。月日が重なり開拓地にも容しやなく寒さがやつてきた。寒い夜あけに出発するわが子に対する妻の気の配り方には、何度となく男泣きさせられた。たまに配給される米は全部子供の弁当になり、自分達は麦とものこしが常食である。

正月が過ぎて三学期に入り、子供は再び通学となつた。「ただいま」という元氣な声と共におろされたのは、同級生から贈られた沢山の餅であつた。こうした近隣愛に子供は先生をなつかしみ学校を無上の樂園として元氣は倍加できるようであつた。こうした楽しみも東の間、正月十七日には一尺五寸の大雪に見舞われ、驚ろかされた。これにはちよつと不安を感じた。ちよつとの歩行も困難となり、交通は途絶の状態となつた。これでは子供にはほとんど歩けないので、私は第三発電所間約二キロの軌道を何回となく雪踏みをして道

をつくり、翌朝から子供に脚絆をつけさせて送ってやるのだが、ちよつと風が吹くと吹雪が道を元通りにしてしまふ。親もまた通学以上の努力をしたものである……。」

拓く者の心——「拓く者の心、これこそ全く尊いものでなくてはならぬ。現実には甘んずるのではなく、満足することが出来なければならぬ。いくら逆境に逢着するとも不満があらわれてはならぬ。すべては「無」から「有」へ転換するのであるから、あらゆる苦痛を耐え忍んで欲するものを獲得するまで戦わねばならぬ。不屈不倒とは全く拓く者の心でなくてはならぬ。」

私達は周囲の人から絶望視されている所に、唯精神力を綱に生きていくのだ。それだけに不満を抱いてはいけぬのだ。駄目だと誰が言うのだ。それはわれわれに縁のない世の有象無象ではないか。成しとげるのはわれわれだ。まっしぐらに不可能を可能ならしめるのだ。いかに不境に会うとも、努力は前途に光明をもたらすものである。幸いに柳平に現在入植しているものは一人一人が皆この心境に生きていくので、私は全く安心して誰の前にも満足表現するのである。

現実とは将来へのつながりであつて、努力は理想への段階であるのだ。私の現実主義はそこから生まれた。現在が最上である。不満はない。理想も希望も空のもので私は考えない。現在へ最善をつくすのだ。努力するのだ。こうした七むずかしいことは理念であつて、拓者の日々は和やかに暮らなければならぬ。配給の米が買えないから悲歎するようでも困るが、人に迷惑ばかりかけるのはまだ困る。努力が足りないことを知らねばならぬ。柳平の生活一カ年を振り返ってみると、努力のほどは外部からはほとんど無に近いものであつたが、それは物を対象にしたもので、私達はそれ以上に尊い収穫をえたことは事実である。それは、こうすれば大丈夫という自信を得たことである。

その収穫はまず種子の選択で、この土地で結実するものを見つづけること、また創造することである。それから地温を高めることであるが、これは焼地とか堆肥を十分施すか深耕するとか方法を講じなければならぬ。それから酸性土壌ではないか。燐酸の補給を考えなければならぬ。これが私達の一年間の収穫であつた。このすべてを共通的に解決するのは堆肥を作ることである。この堆肥も一朝一夕

に作り出せないものであるから不断の努力が必要である。家畜をふやせば畜産収入のバランスもとれるようになってくるのだが、その原動力になる金にすこぶる縁が薄い。働けど働けどわが生活楽にならずで、いつも食に追われてしまふ。とりあえず皆堆肥を作ること心に掛けた。しかし、一町歩もの畑へ全部堆肥することはできないとのことで、輪番にするとか重点作物にかいろいろ考慮するわけである。とにかく、第一年の夏は以上の結果で終り、炭窯も六基整つたのでいよいよ製炭が開始された……。」

「拓くもの心、これほど尊いものがあるうか。どうしてこんな力が生じるのか、我が身の強健さに感心するのである。また私達はすべての問題を会議的に必らず常会を開いて協議実行に移すのであるが、共に語らい拓く者の心を謳歌するのであつた……。」

新しい人間関係の創造と実践

——金峰開拓におけるSCI——

共同生活という言葉からまず我々が想像するだろうことは、衣食住すべての点にわたつて個人の所有物とか住居とかは一切なくして

しまつた完全な「共有共産集団」であらう。だから、何人の人が集まつてきても、それは大きな家族の一員のごとくに自由にむかへられ、日常生活の中の役職の分担以外には何の平等も差別もないという人間集合体である。その構成員ひとりひとりに個性があり、異つた身体と能力を有するということを除けば、生活の条件は徹底して共有であり同等であるという。

このようなイメージをもっていた人々は、金峰開拓をみてこの共同体が現実そのような形では存在していないことに気づかれることだろう。例えば、

- (1) 五家族が五戸に分かれて住み、衣食住は各戸がそれぞれ独立した形で生活が営まれている。

- (2) 全体約四〇町歩の敷地のうち、約二五町歩は県からの借地（であるから、これこそ真に共同利用地ともいえる）であり、残りの約一五町歩はそれぞれの四戸（SC I センターは除く）の持つ私有地を組合に供出したという形で、それが共同に使われてはいるが最終的所有権は各戸に属する。現在でも、各戸独自の畑地を若干ずつ残している。

以上の二つの例は、ここが決して普通の農業集落とその生活の根本は余り変つてはいないことを示している。しかし、それでも、この開拓地をして自他共に共同体とよばしめていけるものは何か。ここでSC I の果した役割について過去および現在にわたつて語らなければならぬ。

この開拓地は約十年前には、現在平地を南北に横ぎっている林道さえなく、最も近くの村落にたどりつくのにも、唯一の交通手段はトロツコか馬であり、それさえ利用できない時は徒歩にたよつた。「今は軒先まで車があるなんて、まるで夢のようです」とは、まことにいつわらざる思いなのである。また、現在後継者（二代目）として活躍している三人の青年たちは、同じ町内の中学校に通うのに片道一〇キロに近い山道を往復し、そのためには毎朝二時〜三時に起き家を出て、夕方五時〜六時頃までに家にたどりつくという毎日であつた。幸い、小学校だけは、開拓者の主婦の一人が教員の資格を有していたことから、開拓地の中に開設された柳平分校で過ごすことができた。当地における開拓者の入植の動きは、直接的にはやはり終戦と切り離しては考えられない。ここに住みはじめてから、長

い試行錯誤がくりかえされ、開拓者として何を生産の主体にするかが考えられた。とにかく、自給自足できるようにという考えに立つて、最も多い時で八戸が、それぞれ戸別に営農していた。しかし、いろいろな意味で肉体的にも精神的にも限界を感じ、五戸までが離農するということになって、初めて残された三戸はお互いに強い連帯感でむすばれるようになり、更に悲壯な決意をもって再出発することを誓ひあつたのである。（この三戸に後から一戸が加わつて現在の四戸となつた。——昭和三〇年頃）

この超高冷地（平均海拔千五百米）での農業は種々な点において、自然条件の制限を受けることを余儀なくされる。しかも借地の大部分が一五度〜三〇度内外の急斜面であることを考えてみれば、それは苛酷なくらいに厳しいものであつた。とにかく、当時の（そして今もおそらくそうであらうが）日本における営農限界は海拔千三百米までといわれ、柳平での開拓は、すべての権威者、役所等から最初から要注意あるいは不可能という眼で見られていたようである。ところが、その常識を破ることこそが、その限界に挑戦することこそが、今後の日本農業のために、更には国

のため社会のために最大の貢献をすることに
なるという決意にもついた開拓者の固い団
結心は、この頃になってゆるぎのないもの
までなっていた。非常に劣悪な条件の中に残
された人間同志が強く団結して共に事にあ
る時、そこに信じられないほどの力が生ま
れる。正に金峰開拓においては、もはや残され
た(ある意味では選ばれた)四家族十数人前
後の人たちが協力して生きなければ、どうに
もこうにも動きがとれないという事態にまで
追い込まれてしまったのである。絶対絶命—
—背水の陣をしくことを余儀なくされた開拓
者たち。しかし奇跡はここに起こった。この
開拓は除々にまた起き上がっていったのであ
る。以前と異なるのはそれが今度は「共同体」
としてのエネルギーをたくわえながら成長し
ていったことである。

この初期十年間につちかわれた「共同意識」
は、昭和三八〜三九年、本格的に共同事業と
して「酪農」を開始してから二、三年目、乳
牛の越冬飼料(サイレージ、乾草等)の充分
な確保に失敗して、冬期の乳牛管理に致命的
打撃を受けた時、大きな試練の時をむかえた
のである。

昭和三十九年新年拝賀式の席で、組合長は「

決死の覚悟でこの一年を乗り切ろう」と皆に
切実にうたった。何でもよい、とにかく浮
かび上がらなくてはならない。そんな気持で
全員心を張りつめ、力を出しきって悲壮な決
意で冬を越し、春をむかえた。そして四月某
日、全国開拓者婦人代表者会議に出席してい
た若月組合長夫人は、同会議に新しいキャン
プ・プロジェクトをさがすためS C Iの説明
にきていた佐藤博厚事務局長と会い、「S C
Iワークキャンプ」という可能性のあること
を知らされたのである。「国境・人種・宗教
などありとあらゆる差別と偏見を超えて、実
際の援助の手をさしのべん」とするS C Iの
存在は、正に突然の慈雨にも似て、重大な意
義をもった。「我が悩みをいやし憎しみをく
だけ、諸人の心に愛のきざすまで。花咲くこ
の大地人の世の愛に、戦いも消えはて平和か
がやかん」と歌われ「言葉より行動によって
平和を」と説いた絶対愛善の行為は、開拓の
人々の心を深く大きくゆさぶりなぐさめるこ
とになった。

さて、この人々は、このように「S C I
運動」を非常に有難い気持で受けとめてきた
わけであるが、彼らはそれを「奉仕の精神」、
「神のように絶対に誠実になされた行為」と

表現する。考えてみるに、恐らく、若い学生
や熱気にあふれた青年達が高い理想を抱いて
グループを作って活動する意気こみに感ずる
ところ大であつたらうし、こんな山奥の我々
のところまで、よくまあ来てくれたという感
激は大変なものであつたらう。だから、それ
がただ一回の奉仕活動——お祭りさわぎ——
であっても、心理的に開拓の人々に与えた印
象は清烈であった。すがすがしいまでの善意
と誠実に満ちた人間関係をここに見ていた
わけである。

たしかに「もう二度とは来てはくれまい」
と心の一部では開拓の人々は考えていた。し
かし、海拔千五百米の超高冷地での想像を絶
した重労働(であったと第一回目のキャンプ
参加者はもらしていた)急斜面を含めた牧草
畑を登り降りしての牧草刈りや草集め、サイ
ロづめは、主に都会から参加した七人の若者
にとつて、すばらしい経験以外に何であつた
ろうか。

開拓の人々の危ぐに反して、S C Iのメン
バーたちは、金峰にもう一度帰る道をえらん
だ。昭和四〇年三月、七月八月と二回目、三
回目のワークキャンプがここで組織されたの
に続いて、春、夏はいよいよ及ばず、機会ある



ごとに、一週間〜三週間にわたるワークキャ
ンプが現在までもたれつづけている。

さて以上金峰開拓の入植および彼らの側か
らみたS C Iとの交渉を略記してきたわけ
であるが、ここでS C I又はワークキャンプ運
動のもつ人間関係の側面にふれなければなら
ない。

ワークキャンプはそのほとんどが、大きな
意味では、救援活動という形をとる。「助け
を必要としている人々がいる」、「困っている
所がある」などが、この行動の大義名分であ
る。ある人はこれを奉仕(Voluntary Service)
とよび、他の人は、相互扶助精神による犠牲
(Mutual Sacrifice)という。その最終目的は、
当然「平和なる社会の建設」であり「苦悩の
ない世界の形成」である。キャンプ生活は各
人の徹底した平等観と自覚性から生まれる自
律と建設的創造的労働意欲がもとになって、
共同生活を営み、協同作業にもいそむ。そ
の心の深くで意図することは、そのように無
差別に寛容に、その地域に貢献することの中
から、分離された人間関係を復活させ、憎し
み闘うもの同志をして愛しみと喜びの念をも
って相対することができるような空気を作り

出すことである。その時、その時に応じて、
キャンプから得られるそうした和解や仲直り
の思いのくりかえしは、それぞれ程度の差は
あっても一括して云えば、「新しい精神」の
拡大ということになるのではなからうか。そ
れは限らない自己脱却であり、自己および他
己の発見であるとも云える。キャンプ生活を
経験することから、旧い自己を常に脱け出し
てゆくという過程は、例えていえば、水の流
れが寄り集まって、小川となり、支流となり、
本流に流れこみ、やがて、大海へと導かれて
いくのに似ている。我々人間は、そして特に、
このような活動にたずさわるボランティアは、
この水の一滴のようなものである。それ自体
は少量の水であっても、それが多量に集まる
ことによって、最終的には、信じられない程
の強さとエネルギーを出す。しかし、エネル
ギーを出し、威力を増すためには、水が水を
よばなくてはならない。集まらなくてはなら
ないし、動かなくてはならない。水は一カ所
にとどまることはしない。また、キャンプ生
活を通して、我々は人間というものが、互い
に深く強くむすびつけられているもので、そ
れを認めようが認めまいが、この結びつきが
はるかにずっと限りなく、人から人へ、人か

ら物へとつながっているのだという事実——そして唯一の真実に目覚めてゆくのである。人間同志は、何もしない何も云わない前から既に一体であり、むずびつけられているという自覚は、この種の運動を進める場合絶対に必要であるし、また我々人間が愛善の心をもって誠をつくすために忘れてはならない最大のものである。

更に、もう一歩つっこんで考えてみれば、人と人が離れがたくつながっているということは、人がまた、周囲のあらゆる自然——太陽、空気、水、山川草木のすべて、生きとし生けるものの全部と、分ちがたく離れがたくつながっていることを意味しているのである。従って、ワークキャンプ運動は、全体的意味での人間の復興をめざすということができよう。

ところが虚心に我々の日常生活をふりかえってみると、「国籍がちがいが、人種がちがいが、宗教がちがいが、言語が異なる、信条が、生活習慣が異なる」からといって如何に大きな誤解が生まれ、争いが起きていることか。人間同志ばかりではない。最近では、人間自身が、その生きるための環境を、一方的に破壊し抹殺せんばかりの勢いである。これを単に、近

代科学文明の短所、悪へいばかりが原因だとはいうまい。人間そのものが、どうして存在しているのかという人類の発生起源にまでさかのぼった反省を試みる必要を痛感するのである。そして、そのために我々はどうすればよいか。

金峰プロジェクトに再び眼をむけよう。金峰プロジェクトはもちろん、金峰開拓が財政的に立ちあがることを目的にしているのではない。約千五百万円の借金をなくすことが現実的問題として解決されなければならないことは確かである。が、それと同時に大切なことは、ここに住む人々の住み方であり生き方である。どのように生きることが、共同体における最善の人間関係をつくり出すことになるのか。現在までのこの点における金峰開拓の特徴は、組合長の「このような共同事業においては、個人個人の努力差が残るような方法をとるべきだ」と思う。完全に、すべてを共同化することは、その意味では非常にむつかしいことで、特に満州での開拓経験等を通してわかったことは、日本人は完全共同化されたとともに「係根性」というか、そのようなものをむき出しにして、自発的に積極的

方に代表されよう。この考え方に對して、最近、特に後継者側から「完全協業が必要ではないか」という意見が出されている。この意見は主に実際の作業量、労力など現実的運営面から出されている。丁度、前者が過去の完全協業に近い経験を通しての人間関係の変化にスポットをあてているのに対し、後のそれは現実の更に将来予想される仕事のやりくり、効率性という必要から生まれているので、両者を簡単に比較してその軽重を問うことはさしひかえよう。とにかく、二つの流れ、即ち「人間は完全に共同化された生活の中でうまくやっつけよう」という人と「人間はその性格から部分的に共同化されない所を残しておくのが共同化の秘訣である」という人と、両方が存在することを明記しておきたい。

さて、金峰開拓とS C Iはこのどちらの道をとるべきなのか。それとも両方に正しいのだろうか。今後の金峰プロジェクトの歩みの中からその答えが自ら出てくることを期待したい。

「S C Iセンター」樹立をめざして

金峰開拓地に来て生活してみても、まず驚く

ことは、大自然の威力であり、またこの身にひしひしと語りかけてくる生命力とその強さである。周囲の山々、牧草畑の下から上まで

ずつととりまいて唐松や原生林、そして無数の草木、水のせせらぎ、風のリズム、陽のひかり、空のつきぬけるような青さ、夜空のけんらんたる星群、夏の深緑の原、冬の純白の大地、秋の豪華なばかりの紅葉……どれ一つとっても深い感嘆の心なしにはながめられない。これほどに強烈な圧倒的な自然舞台の中で、むしろひっそりとした形で、片すみに一戸、少し離れて一戸という風に五戸の家が南北約一キロにわたって細長く抜がる谷間に点在する。西側の谷間を流れる琴川上流の山川の水は年間を通して絶ゆることはない。山一つへだてて、昔のままの森林の中に一歩踏みこんでみると、二六年前、悲壮な覚悟でここに入植してきた開拓者の心意気と苦悩に満ちた年月の一端を味わうような気がする。森を切り拓き、岩石をくぐり、野草とたたか

って畑を耕しながら、血と涙と汗にまみれて働き続けた開拓魂が現在ここに小さな一つの社会を築いた。

その一つの人間社会の原型ともいえるこの農業集落において、S C Iは新しい実験的試

みにとりかかっている。「S C Iセンター」という名の長期プロジェクトである。

一、トレーニングセンターとしての役割

(1) ボランティア活動のエネルギー収束の場として——

ここでいうボランティアという言葉の意味を我々は正しく理解しなくてはならない。ボランティアはあくまで自発的に、自ら望んで公共の福祉のために行動する人であり、公共の福祉とは絶対に多数決原理による多数のための福利厚生ではなく、一人の例外もなく全員が平等に恩恵を受けることでなくてはならない。

そして、この場が訓練の場として真に役立つのは、今の社会であらゆる面で問題となっている「人間関係復興」の試みが、ボランティア活動のエネルギーの中にとらえられて、一般の人々の共通の関心事としてここに持ちこまれ再びS C I運動を通し、あるいはボランティア一人一人の心を通して、社会そのものに伝えあげられてゆくこと。

(2) これからS C I運動をめざす人々のための実学の場として——

「言葉より行動によって何かを学べ。自己を

知れ」というのが先ずワークキャンプに参加して得た実感であることは多数の人々が認めるところである。非常にわかりやすい方法で同じことがこのプロジェクトの生活に参加することから学べるようである。したがって、これからS C I運動または類似の道に進まんとする人は、是非このような長期プロジェクトに少なくとも一カ月間身をおいてみるのである。親子の絆、兄弟の絆、友人との絆、異性とつながり等見知らぬ人との関係、自然とのつながり——これらすべての結びつきの底に流れる大動脈のような存在に気づかせ、さらに生きるべき道を考えさせるものをこの場は持っているようである。

(3) ワークキャンプのあり方の研究とその実践の場として——

何度もうように、ワークキャンプは決してその場限りでは終わらせてはならない可能性を多く含んでいる。というのは、一つのワークキャンプに参加し又それに関係した人々の中に生み出された良心的「エネルギー」が各自の趣きに従って自由に伸ばされれば、そこにもう一歩先の実践があらわれ「ワークキャンプ」が生み出されるからである。その意味でトレーニングセンターとしての機能が十分に

生かされるためには、参加者全員に自己の内の可能性を考えさせ、それを行動に移してゆけるような動機を与える場としなければならぬ。何度も何度も同じ人が訪れても、その度に新鮮な力を身につけ心に満たしてゆけるような場でありたい。知恵をみがき、行をつつしみ、心を静める場でありたい。

(4) 長期奉仕の実践の場として——

我々人間の有する宿命的弱点の一つは、自分の立っている場、自分の知っていることのみを物指として、大体の「ものごと」を判断してしまふことである。これはもちろん人間のもつ本能的自衛意識と深い関係があるのだから、我々が長期奉仕を通して学ぼうとすることは、同じ一つのものごと、立場が異なり人が違えば、実に多くの面から見ることが出来るという事実である。従って、長期奉仕に最も必要なものは善意の忍耐である。奉仕期間中に恐らく我々のもっているものすべて、自身のその心と身がボロボロにすりへつて、何も残らないと思うほど、自己の存在そのものを問われる機会にめぐり会うはずである。我々は人間について絶望することを知り、またその絶望の中から立ち上ることを学ぶ。そこから初めて正しい行為と正しい目標を知

ることができる。これらの体験を含んだ長期奉仕の一つの場としてありたい。

二、S C I センターのあり方 ——新しき精神の誕生のために

(1) 自分自身を知るために——

自分は単に現実主義者であつてはならず、また批判者のみであつてもならず、さらにただの理想主義者でもない。絶対的一つの真理——人間は死ぬものである。自分は人間で正しい見解、正しい思考、正しい言葉、正しい行ない、正しい生活、正しい努力、正しい思慮、正しい瞑想——この八つを実現できる

とき、自分自身を知る。

(2) 新しい人間関係を拓くために——

S C I 運動の根本の一つは、新しい人間関係を認識し、それに基づいて生活することである。人間が真に平等たるゆえんは何か。我々がめざめねばならない人間関係のあり方は、常に大自然と我々の底に流れてくる生命のエネルギーのあらわれとしてとらえる。

S C I 運動は、この新しい人間関係を拡めるための一つの場である。自由自在に、人間と自然のあるところどこにでも移し設けること

の可能な場である。ワークキャンプの存在意義は認めるが、今は更に深く現実の自分の生活の根をさぐることから、生活そのものの中に運動の展開を試みる時でもある。自分の生きているこの場で可能な運動の芽はないか。金峰 S C I センターは、ようやく柳平にとって不可欠の場となり、S C I にとって必要となつた。これから真に新しい人間関係、人間精神の開拓が始まる。

S C I センターは、アジア地域トレーニングセンターの機能も含めて、それ以上の役割をはたしてゆかなければならない。まず、

(a) ここに S C I 運動にたずさわつてきた何人かの人が自給自足の共同生活を試みること。

(b) 生活を共にすることの意義は、常に新しい人間関係、人間精神を体得し続けること。

(c) 定住者（五〜十年以上）を中心にあらゆる方面から、あらゆる段階の人々がここに集まり、あるいは生活して、そのときどきの S C I 運動あるいは平和運動に反省を加え、新しい計画をねる場とすること。

(d) 総合的の人間教育の場として社会に開放してゆくこと。

(完)

共同農場へ参加のよびかけ 北海道天北の「みどり農場」

かつてキブツ研修生としてキブツの生活を体験し、現在北海道幌延町の農協で働いている丹羽達雄氏から、次のような呼びかけの手紙がおくられてきた。

「……当地は北海道酪農地帯の一つ、天北の南端で、サロベツ原野の南端で、稚内より南に七二キロのところにあります。当地に、十年前にはじめた共同経営農場があり、これまでにイスラエルのモシャヴ・シトフイに似たような形態でやってきましたが、十年間の経験と反省の中から完全共同体としてキブツ的な形態としてやってゆくのがよいのではないかという結論になり、昨年よりその準備をすすめてきました。

昨年より、土地、家、その他大きな財産は共有にふみきり、給料制を廃止して、小使いと実費分配にふみきりました。本年度は、共同施設を建設する計画です。現在は、基礎的な段階で、たくさんやらなければならぬことがあります。我々は、この事業を多くの若

者と共に同志的な結合の中でやりたいと考えております。個人の能力は弱いものですが、それが集まれば大きな力となります。我々は共同

体を実践し、我々の理想を共同体の中で現実にしてゆくことが、最良の方法と考えております。我々の運動に賛同し、ともに新しい理想郷実現のために歩んでくれる同志がいたら紹介して下さい……」

この手紙には、その農場の概要がそえてあつたので、ここに抜粋してみる。興味を持たれた方は、直接連絡して欲しい。

名称 農業組合法人 緑酪農組合（別称「みどり農場」）

目的 人間愛と自然愛の中から生産し、人間が人間らしい生活することを、我々は実践する。——私達は思想、宗教を越えて人間の輪を拡めてゆく。私たちは、すべて話合い、全員一致で実行する。

住所 北海道天塩郡幌延町問寒別（国鉄宗

谷本線の問寒別駅より三キロ）

自然条件 夏は平均気温二二〜二三度で、牧草は年三〜四回刈り。冬は雪が多いが、寒さはそれほどでもない。春には、フキ、ワラビ、ネマガリダケ等、山菜が豊富。

面積 八四ヘクタール（平地）今年中に五

四ヘクタール購入予定
家畜 成牛六五頭 育成牛三〇頭 馬一頭
施設 牛舎、育成舎、車庫、農機具庫、住宅三戸。本年度は、食堂、フロ、調理室、事務室、倉庫、住宅等の共同施設を建設する。

機械 トラクター二台、酪農作業機一式、トラック一台、ライトバン一台。

人口 九名（男四名、女五名）
募集条件 (1)男女を問わず。

(2)一年間は実習期間とする。一年後に本人が希望すれば正メンバーになれる。

(3)出入りは本人の自由。
(4)財産その他は一切不要。

(5)農場での生活や仕事は、他のメンバーと同じ。

*よりくわしくは、直接に問い合わせて下さい。